

# 旅

先で、そのまわりの広報紙を見かけると、必ず手にとってみる。ここに暮らす人たちの日常を少し垣間見た気がして、身近に感じられるからだ。最近では自治体のホームページでも読める。だから、訪ねる前に目を通すこともある。旅行ガイドにはない旅のヒントを見つけることも少なくない。雄武町を訪れた人たちも「広報おうむ」を手にとり、似た思いを抱くのではないだろうか。

雄武産の秋サケを特集した昨年の11月号は見事だった。「秋サケと一緒に送りたいから」と余分にもらいに来た人が現れ、第60回北海道広報コンクルの広報紙「町村の部」で最高賞の特選に輝いた。なぜ、秋サケが「雄武の宝」になったのか。携わる人たちを訪ね、思いを耳を傾け、その姿を追った。知りたい、伝えたいとの思いが行間にはじむ。

今年の9月号と10月号で連載した農業特集「先駆者タチノ記憶」、11月号の戦争特集「癒やされない傷跡」にも、「人が主人公」との姿勢が貫かれている。「どんな小さな記事にも必ず人がかかっている。それを忘れるな」。駆け出しのころ、デスクから受けた言葉を、あらためてかみしめている。

「まち」があつて「人」がいるのではない。「人」がいて「まち」がある。まちの「いま」があるのは「あのころの人たち」が頑張ったからで、まちに「未来」があるのなら、それは今、ここで暮らす人たちの踏ん張りがあるからこそ。そんなメッセージが込められている気がする。

詩人の茨木のり子さんの詩「自分の感受性くらい」に、こんな一節がある。「駄目なこと的一切を／時代のせいにはするな／わ

# 3

年前から北海道庁より、各市町村の広報紙、担当者にデザインレクチャーをしていただけないかとの依頼があり、各市町村の広報紙を見る機会を頂いています。感想としてデザインは、あまり良いとは思いませんでした。事情を聞けば、制作のほとんどは各市町村の職員が企画、取材、原稿書き、編集、素材となる写真やカット絵など、そしてそれらをデザイン、印刷データにするまでの作業をほとんどが1〜2名で行っている事、そして毎月発行していることを知ってとても驚きました。

通常は企画・編集は編集長がいて、取材や原稿、キャッチコピー、校正業務はコピーライター、写真はカメラマン、カット絵などはイラストレーター、それを組み立てデータ化するデザイナー、それらがチームで作業を進める事が多く、制作物の質はこれらの各パートのキャリアや能力で左右されます。

さらに驚いたのは、行政職の方は異動があり同じ部署に長くいられないということ、常にキャリアが浅い方がこの業務を行っているという現状がありました。それは地方広報紙の大きな課題のようにも思いました。

そんな中、今年もたくさんの方の広報紙をみさせていただき、とても目を引き、印象深い広報紙に出会いました。

それは「広報おうむ」でした。特に目を引いたのが特集でした。各市町村の広報紙の特徴として原稿量が多く、物理的に文字の大きさが小さくなり、余白スペースも少ないために読み憎くなるのに対



## 島田 季一

しまだ・きいち。北海道新聞紋別支局長  
1967年小樽市生まれ。1992年北海道新聞社に入社。生活部、苫小牧報道部、函館報道部、文化部、報道本部、釧路報道部、東京報道センターなどを経て、2012年7月から紋別支局長。

## 「雄武の宝」として大切に育ててほしい

ずかに光る尊厳の放棄。「みんなのひろば」や「私の夢」は、まちのあちらこちらにともった「小さな輝き」で未来を照らしているかのような。

「宝探し」だと思う。「広報おうむ」は「雄武の宝」を一つ一つ探し出して、届けているのだ。「今、次の特集に取り掛かっているのですが、その次、またその次と、やりたいことがたくさんあつて若干頭を悩ませていきます」(今年10月号の編集後記)。その悩みが尽きない限り、「広報おうむ」の将来は明るい。

次の1000号に向けて、何が必要か。一つには、まちで暮らす一人一人が、それぞれの「雄武の宝」を磨くことだろう。宝があれば、

し、「広報おうむ」は原稿、写真、余白のバランスが良く、読みやすくなおかつ、次ページをめくる楽しさを感じました。

できてしまえば何て事は無いように見えますが、企画・編集時からデザインイメージができていなければ、なかなかこのような紙面づくりにはならないと思います。さらに言いたい事、伝えたい事の優先順位がはつきり整理されていて、何を伝えたいかわかりやすくなっています。

特集以外の情報ページでも、それは反映されており、細部にわたり気を抜かず気持

## ますます素敵なる広報紙になることを予感。 北海道の広報紙を牽引して行ってほしい。

ちよい紙面作りになっているように感じました。伝えたい気持ち、デザインの質を上げ、それは見る人に感動を与え、それを励みにまた気持ちのこもった広報紙作りになっている素敵循環が感じられました。これからもますます素敵なる広報紙になる事を予感させてくれました。デザインからみれば北海道の各広報紙は大きな問題をかかえているように思いますが、広報おうむのような熱い広報紙で北海道の広報紙を牽引して行ってほしいと思います。頑張ってください。



## 三善 俊彦

みよし・としひこ。グラフィックデザイナー  
1966年北海道富良野市生まれ。2000年三善デザイン事務所設立。北海道造形デザイン専門学校、大谷大学非常勤講師。北のペーパーコンテスト最優秀賞、北海道知事賞、竹尾賞など受賞作多数。モエレ沼公園やJRタワーのアート関連の仕事に携わる。

## 広報「おうむ」へのメッセージ

*It is a message to public relations OUMU*